

〔講演〕 現前する過去—記憶する義務

〔講演者〕 ヘルムート・オルトナー

〔翻訳〕 須藤正美

2017年12月19日（火）、龍谷大学深草学舎至心館の矯正・保護総合センターにおいて、ドイツの著名なジャーナリストであり作家のヘルムート・オルトナー（Helmut Ortner）氏をお招きして、講演会を開催した。

同氏は、1950年、ドイツのゲンドルフ生まれ、オッフエンバハ・アム・マイン造形大学に進学。ダルムシュタット単科大学において、社会教育学と犯罪学を専攻した。1978年以降、多数の著作を発表している。とりわけ、ヒトラー暗殺未遂犯の評伝である『孤独な暗殺者 ゲオルク・エルザー』は、大きな反響を呼び、多くの外国語に翻訳されている。

今回の来日は、ヘルムート・オルトナー著〔訳〕須藤正美『ヒトラーの裁判官フライスラー』（白水社、2017年）——原題は、Der Hinrichter: Roland Freisler, Mörder im Dienste Hitlers——の出版を記念して、特定非営利活動法人「刑事司法及び少年司法に関する教育・学術研究推進センター」（刑事・少年司法研究センター）の招聘に応じて実現したものである。京都での後援に先立って、12月17日（日）には、東京で同法人主催の「ヒトラーの裁判官 フライスラー」についての講演会が行われた（<http://www.ercj.org>）。著書について、詳しくは下記の白水社のサイトを参照していただきたい。<http://www.hakusuisha.co.jp/book/b280299.html>

講演会当日、日本政府は、2人の死刑を執行した。講演後の質疑は、自ずとこの問題が中心となった。何故、日本のような産業の発達した、自由で、民主的な国が処刑を続けているのか。ドイツ国内では大きな批判がある。場合によっては、2020年のオリンピック・パラリンピックをボイコットする動きが起こるかもしれない。歴史が示すように、死刑廃止は、時の政府がその政治的敵対者を弾圧する最も効果的な手段である。死刑と表現の自由や民主的政治体制は、一体をなすものである。

アメリカでは、自由と民主主義を至上の価値と認める知識人たちは、全国紙に500人も知識人が連名で死刑廃止を訴えるメッセージを掲載するなど、具体的な行動でその意志を示している。何故、日本の知識人は行動しないのか、と尋ねられた。

日本では、死刑を批判する知識人は少なくないが、明確に賛成を主張する知識人は少ない。「黙る」という表現、「何もしない」という行動が、処刑を続けるという現状に賛成の意志を表示しているのだろう。日本の法学者は、ドイツに行くと「日本の大衆は愚かで、野蛮な死刑を支持している」と言って嘲笑するが、日本に帰ってくるとこの問題について「黙る」。日本という国は、たしかに産業は発達したが、自由でも、民主的でもないのだろうと言わざるを得なかった。あるいは、知識人と呼ばれるような階層がないと答えれば良かったのかもしれない。来年2018年には、死刑に関する新著が、翻訳される予定である。

京都での講演会は、龍谷大学法学会と龍谷大学犯罪学研究センターが主催し、同矯正・保護総合センター刑事法未来プロジェクトに後援していただいた。当日の通訳は、同書の翻訳者である須藤正美氏にお引受いただいた。

この場をお借りして、こころより御礼申し上げる。

以下は、講演の翻訳と原稿の原文である。

〔講演〕「現前する過去—記憶する義務」

私は皆さまに私の国ドイツについてお話ししたいと思います。自らの過去、つまり私の父や祖父の世代が世界に恐怖と野蛮をもたらしこととなった暗い歴史の一時期との取り組み、骨の折れる、ときにはたいへんつらい取り組みについて、述べたいと思うのです。あの世代は各人各様に加担しました。命令の受け手として、自発的な官僚として、イデオロギーを信じた確信犯として、あるいはともに歩んだ者、ともに知っていた者、目を背けた者として。

いわゆる「第三帝国」が終焉を迎え、占領期も終わると、ドイツの人々は、罪、共同の罪、記憶の抑圧、恥辱といった負の遺産に直面させられました。

罪は個々人だけでなく世代全体にも関係します。罪は個々の行為だけでなく歴史の局面全体にも関わるものなのです。社会の罪と個人の罪。それらはどこで互いに絡み合い、補い合うのでしょうか？ どこで組み合わせられて冷酷と野蛮の集合体となるのでしょうか？

ドイツ人文筆家であり法律家でもあるベルンハルト・シュリンクは集団的な過去の罪と言いました。そしてドイツの人々はあの困難なプロセスを「過去の克服」と名付けたのです。それは長らくドイツの政治文化を特徴付けたものであり、その影響は今日もなお続いております。

しかし事実はどうだったのでしょうか？ ありていに言えば「第三帝国」の時代が現代から姿を消し、ナチズムがある程度、個々人の歴史経験の集積の中から消えていったということなのです。加害者も被害者も、すでに

あらかたこの世を去っております。

我が国のほとんどの者にとって、ヒトラー時代はもはや実際に経験された過去ではなく、単なる歴史にすぎません。ヒストリーであってメモリーではないのです。

私もその一員である戦後世代は、元首相ヘルムート・コール氏の言葉を借りると「後から生まれてきたという恩寵」に浴する世代です。この後から来た世代に責任はありません。しかし記憶する義務はあります。というのもドイツ系フランス人の文筆家アルフレート・グロッサーが言うように「過去の出来事はそれがただ過ぎ去ったからといって現在において不在であるということにはならない」からです。

それでは現在に眼を向けてみましょう。

我が国では昨年の夏、世界的に注目された裁判が結審しました。法廷に立たされたのは九四歳の高齢者、かつてアウシュビッツの看守だった男でした。裁判官たちは犯行への彼の具体的関与を立証できなかったにもかかわらず、少なくとも17万件の殺人を幫助した廉で、彼に禁錮五年の有罪判決を下しました。これは尋常ならざる判決でした。公判中に被告人はどのような様子だったでしょう？ 彼は一九三三年から一九四五年にかけての行為と不行為が槍玉に上がったときに同世代のほとんどの者が七十年前からしてきたことを踏襲しました。すなわち沈黙を貫いたのです。

弁護人によれば、彼は自分の家族にさえアウシュビッツの話はしませんでした。被告人のすでに成人した息子が傍聴人席に座っていました。途方に暮れ、言葉もなく、不安げに。息子は父の行為について何を知っていた

でしょうか？ 何を知ることができたでしょうか？ これまでに息子は父に問いを發したのでしょうか？ ヒトラー・ドイツについて。アウシュビッツについて。そして父親が若き兵士だった頃のことについて。沈黙にはしばしば二つの種類があります。一方に何も言わない人がいて、他方には何も問わない人がいます。戦後、多くのドイツ人家庭をこうした沈黙が支配していたのです。

法廷がかつてアウシュビッツで看守を務めたこの男について判断したのは、絶滅収容所に起用されたという事実を通じて彼はその殺人機構が十全に機能することに貢献した、という点でした。それは立証済みであるとしたのです。この男がアウシュビッツに配属されていたのは一九四三年から翌四四年まででした。彼は公判で、自分がナチス絶滅収容所の親衛隊看守であったこと、大量殺戮について知っていたことを認めています。

検察は「大量殺戮のスムーズな遂行」に被告人が貢献したこと、そして殺害を是認していたことを確認しました。そして裁判所は彼の貢献がどれほどのものだったのかという点は重要ではないと判断したのです。

禁錮五年の判決。「末端の」親衛隊員でもアウシュビッツのすべての殺人に共同の罪がある。それはドイツの裁判所が初めて示した判断でした。この有罪判決に込められたメッセージ、それはアウシュビッツの親衛隊看守となることで誰もがすでに加害者となったということであり、そもそも誰一人アウシュビッツに関与してはならなかったというものです。

裁判の後にも多くの問いが残りました。司法は七十年以上前の犯罪を裁くことができるのか？ 裁判所はホロコーストに加担したとして人を妥当な形で罰することができるのか？ そして被害者についてはどうなのか？

そもそも彼らに正しい裁きがなされうるのか？ 中でも一つの問いが、すべての問題の上を厚い雲のように覆っていました。それはこの被告人に対する裁判が行われるまで、なぜ七十年以上もの時がかかったのかという問いです。

それに対する答えはシンプルでもあり、人を驚かせるに足るものでもあります。すなわち社会も国家も司法もそれを望まなかったということなのです。戦後政権、アデナウアーの共和国、社会民主党のブランド・シュミット時代、そしてヘルムート・コール政権、いずれもそれを望みませんでした。

いまでは、管轄検察庁や捜査機関の関心の欠如や訴訟の引き伸ばしについて、それぞれの政権に責任を直接負わせることはできません。法治国家には独立した司法があるのです。ただ立法府からのシグナルはありませんでした。さらにナチスの犯罪者たちを、彼らが白髪の老人となる前に法廷に立たせようという政治的意志もそこには欠如していたのです。

かくして年老いた親衛隊員に対する刑事訴訟は単なる象徴に止まることとなりました。しかしそれが思い起こさせたのは、国家による大量殺人への加担を不問に付してはならない、たとえそれが何十年も後にようやく行われたとしても、不問に付すべきではないということです。例の親衛隊看守は有罪となりました。しかも九十四歳で。同様の訴訟が今後起こされることはもうほとんどないでしょう。しかし彼に対する有罪判決は、何千何万の殺人者たち、机上の犯罪者たち、殺人幫助を行った人々が処罰を免れた事実を、改めてまざまざと想起させることになりました。

ナチスの不法行為についてのドイツ戦後司法の取り組みが遅延と躊躇の

歴史であったことは、事実です。

少しばかり数字を挙げてみましょう。2005年までにナチス時代の可罰行為に関して総勢17万2294名が取り調べを受けました。これはなされた犯罪の規模、それに関わった人間の数からしたら、ほんの一握りにすぎません。それには理由がありました。当初、司法機関にはかつてのナチス時代と同じ面々が居座っていたのです。その多くは渋々、業務に当たっていました。政治的にも訴訟の幕引きがせがまれており、すでに複数成立していた恩赦法がそれを後押ししました。

実際に法廷で自己弁護しなくてはならなかった被告人は1万4693名にすぎませんでした。そして結局有罪となったのはわずか6656名で、5184名の被告人は無罪となりました。約六割の人々に言い渡された有罪判決は最高でも禁錮1年というものでした。人類史上最大の犯罪という点を考えるならば、怒りを禁じえないスキャンダラスな収支決算と言えるでしょう。

ナチスの加害者たちには司法を恐れる必要など何もなかったのです。では社会を憚る必要はあったのでしょうか？ 知人や隣人、雇い主の目を恐れる必要は？ 「いつかは終わりにしなくてはならない」それが暗黙の基本方針でした。大方のドイツ人は、戦争犯罪人や人道に対する罪、ナチスへの関与、犯罪的な加害者たちの生き様など、要するに倫理的・文明的に破綻していたヒトラー・ドイツ時代のことなど、もはや知りたいとは思わなかったのです。

戦後初のドイツ首相コンラート・アデナウアーの政治は、就任初日から加害者たちへの恩赦と社会への受け入れという点を特徴としていました。ナチス独裁時代の特定の国家行為を不問に付し、それを法秩序の根本とす

る。そういうことが重視されました。こうして殺害や暴行といった不法行為は、当人にはなんら責任のない、「上から」命じられたものだったということになりました。加害者とその加害行為はきれいに白く塗りされ隠蔽されてしまったのです。彼らは自分の行為ではなく「他者の」行為を行ったのだということになりました。いわば代理人として自己の義務を果たしただけ、誓いも他から義務付けられたのであり、党のため、民族のため、祖国のためにしたに過ぎないというのです。忠誠が最高度の美德とされたところでは、忠誠心を発揮することは決して悪いことではありえませんでした。それはひとつのメンタリティであって、そのメンタリティが非難されるべき、侮蔑的で人道に悖る命令にも盲目的に従うことを、忠実な臣民たちに強いたのです。誰もがそうしているからという理由で。どのようなものであれ、命令は命令であることに変わりはない、条例は条例、法は法であるというわけです。

これはハンス・フィルビンガーの理解とまったく同じ考えです。彼は1945年の終戦間際の時期に戦時裁判官として、ある脱走水兵に死刑判決を言い渡しました。戦後はある州の首相にまで出世したのですが、その後、彼の署名入りのさらなる死刑判決が明るみに出て、辞任を余儀なくされました。フィルビンガーの言葉「当時合法であったことが今日不法とはなりえない」は、戦争世代の法理解を代弁するものとなりました。

こうした過去の塗り替えを促したのが、1949年の年末、連邦議会が簡略手続を通じて全会一致で可決成立させた恩赦法でした。これは1949年9月15日より前に犯され、最高6か月の軽懲役刑を課すことの可能なすべての犯罪行為に恩赦を与えるという法律で、八万人を超える人々がその恩恵に浴しました。

そうでなくともドイツの人々の心には、ナチス政権とその侵略戦争の根底にある犯罪性を集団の意識の裡から遠ざけ、隠蔽したいという傾向がありました。そうした隠蔽をアデナウアー政権は首尾一貫して行ったのです。そのような圧力を受けて、特に司法は、かつてのナチス犯罪者の責任を問うことに消極的でした。それは皆さまもご存知のように、とりわけ司法界では、人員面でナチス時代との連続性が根強く維持されていたからです。ナチス絡みの刑事案件で捜査や処理を自ら進んで担当したがる者など、ほとんどいませんでした。

もちろん例外もありました。勇敢な女性たちや男性たちがいたのです。その一人がフリッツ・バウアーでした。彼はヘッセン州の検事長で、ユダヤ系の社会民主黨員でした。数少ない独立不羈の司法人の一人で、若き連邦共和国で指導的地位を占め、実態を糊塗して無害化するために多用された弁護・弁明の決まり文句をことのほか憎んだ人でした。

バウアーはナチスの殺人に関する時効の撤廃を成し遂げました。彼なしでは1963年にあのように大掛かりなフランクフルト・アウシュビッツ裁判が起こされることはなかったでしょう。そして絶滅収容所の元看守たちを相手取ったこのフランクフルト裁判がなかったならば、ドイツの世論はなお多くのナチス犯罪を意識の外に追いやったままだったでしょう。彼はまた、ホロコーストを組織した中心人物、アドルフ・アイヒマンをイスラエルの法廷で裁くことに貢献した人物でもあります。

フリッツ・バウアーはドイツの人々に過去を直視させました。相変わらずナチス時代からの褐色のコネが物を言う司法界の真只中において、しかもそうした司法界の状況に抗って。「一歩事務所の外に出ると、そこはまるで敵だらけの異国のようでした」のちに彼はテレビインタビューで当時の

状況をそう語っています。

バウアーは明敏にも、ナチス国家が歴史上の突発的な事故などではないことを見抜き、歴史的に形成されてきたさまざまな構造と、ナチスの犯罪をあのように許すこととなったドイツの人々のメンタリティを指摘したのです。その旧弊を打ち破ることはあの裁判以上に大変だったことでしょう。これにより彼は保守層からの怒りを買っただけではありませんでした。バウアーは周囲から疎まれ、戦いを挑まれ、さらには脅迫されました。人員面でナチス司法との連続性が回復された戦後司法において、彼はまさに異端者だったのです。彼には友人もほとんどおらず、1968年、一人寂しく亡くなりました。

あとには歴史上の恥ずべき事実が残りました。重要な地位に就いてナチス政権に奉仕した無数の法律家、医師、実業家、ジャーナリスト、将校らが無事に「非ナチ化され」、新生ドイツ連邦共和国の中で自分たちのキャリアを継続したのです。しかし被害者や遺族たち、迫害を受けて亡命を強いられた人々、社会から排除された人々の方はどうだったでしょう？ 彼らはいずれも年金や補償の請求権を巡る戦いの中で、何年も心折れるような経験を重ねなくてはなりませんでした。

自分たちの祖父や父は何をしたのか、何を許してしまったのか、何から目を背けたのか？ そして被害者はどのように損害を補償され、名誉回復されたのか？ それが問われるようになったのは、ようやく1960年代、70年代になってからのことでした。若き頃にナチスを逃れてノルウェーに亡命したヴィリー・ブランド。彼を首長とする社会民主党と自由民主党の連立政権が心を砕いたことがあります。それはナチス時代および1945年以降の時期、つまり加害者や容疑者たちが再び社会に統合され返り咲いた時代

と真摯に取り組む機運をドイツに定着させることでした。これによって長きに及んだ沈黙と揉み消し、粉飾の歴史によりやく終止符が打たれることになります。それは公的で集団的な、痛みを伴う取り組みでしたが、必要不可欠なプロセスだったのです。

では東独、1989年まで共産主義の国であったもう一つのドイツはどうだったのでしょうか？

「社会主義の労働者と農民の国」これは東ドイツのプロパガンダ的な自己定義ですが、その国は自分たちにはナチスの褐色の過去が払拭できると考えました。ナチス政権の時代から続く人的連続性の問題に人々は向き合おうとしなかったのです。100万人を超えるかつてのナチ信奉者たちは、こっそりと社会に統合されました。物議をかもす経歴をもつ加害者の場合には、シュタージ、すなわちどこにでもいて目を光らせていた秘密警察が、積極的な支援を行いました。そこには50名以上のスタッフを擁する特別な専門家チームがあって、それが反ファシズムという建前を守るために奮闘していたのです。

いわゆる「冷戦」の時代でした。

東側でも西側でも問いは残されたままです。集団的な罪はあるのでしょうか？ 過去を意識から追いやり、それどころか否定したりする人々はみな、そうすることで共犯者となるのではないのでしょうか？ ドイツの言論人ラルフ・ジョルダーノはそれを「第二の罪」と名付けました。

個人のモラルや、徹頭徹尾個人的な罪というものはないのでしょうか？ ナチス殲滅戦の加害者とはどんな人たちだったのでしょうか？ 野獣のよ

うな連中？ それとも単なる命令の受け手？ 無関心な官僚？ 歯車装置の中の意志なき歯車？ イデオロギーに染まった確信犯だったのでしょうか、それともどこにでもいるような普通の犯罪者だったのでしょうか？

歴史学は何十年もの間、ほとんど常にヒトラー、ヒムラー、ハイドリヒといった一級戦犯、あるいはアイヒマンのような机上の加害者たちしか論じてきませんでした。現場で手を下した二級、三級の人々は相手にしなかったのです。

しかし人はいかにして加害者、命令に従う犯罪者となるのでしょうか？ ごくふつうの男たちがいかにして非人道的で野蛮な執行人となるのでしょうか？ 何が男たちを恐るべき怪物、殺人鬼へと変えるのでしょうか？

加害者に関する研究が示すように、集団の圧力と状況がそれを要求する場合には、いやこれはむしろ「それを可能にする場合には」と言い換えるべきでしょう。ともかくそのような場合には、きわめて強い同調化志向が発揮されます。

兵士たちに該当することは「普通の」市民や管理者、職員にも当てはまるのでしょうか？ 彼らは同調しただけなのでしょうか？ みんなが目を背けて見て見ぬ振りをした、だから自分もいっしょに見て見ぬ振りをしたということなのでしょうか？ 体制の敵に対する強制捜査や逮捕、血のように赤い貼紙で公示された抵抗の戦士たちに対する民族裁判所の死刑判決、除け者にされ、迫害され、逮捕され、挙げ句の果てには強制収容所に移送されたユダヤ人同胞市民たち。ほとんどの人々にとってそれは死出の旅となりました。こうした一切は、見ようとさえすれば、誰にでも見ることができたのです。

過去の克服。それはドイツの人々が生きていくための方便なのでしょう
か？ 法律の、社会の、政治の偽装表示なのでしょう。そもそも一度
起きてしまったことは克服できるものなのでしょうか？

今のドイツ。過去の現前は別の前提に従っています。前面に出ているの
はアデナウアー時代の否定や否認ではありません。父たち、祖父たちの罪
と共同の罪を迫及して1970年代の懐疑的な世代が投げかけた問いもあり
ません。今日、一方では新しい追悼文化についてのさまざまな取り組みが、
公的な議論を方向付けております。他方ではナチズムの犯罪行為を想起さ
せることは、相対化されてしまう危険に晒されています。そこではとりわ
け「ドイツ人の犠牲者たち」が重視されます。ドイツの都市に降り注いだ
焼夷弾、スターリニズムの犯罪行為の数々。それらは確かに恐ろしい現実
でした。しかしテロルの原因となった加害をそれによって招来された被害
の大きさで相殺することはできません。両者を天秤に掛けること自体、歴
史的に見てきわめて疑わしい行為なのです。

実際に起きたこと、それが異議申し立てを許さない歴史的な神話に道を
譲ってしまいます。ナチス黨員たちの姿や数々のプロパガンダ、繰り返さ
れた犯罪行為、そして現実の恐怖が、ときおり身を悶えさせるような魅力
へと反転します。ナチス時代は思いのままに交換可能な、「悪なるもの」
の符号へと墮落するのです。そこに伴うのは宿命的な副作用、すなわち実際
の出来事の無害化という作用なのです。

かくしてナチスの恐るべき犯罪行為に関する法律家の取り組みは、きわ
めて不十分なままに止まっております。それにもかかわらず、いかに逆説
的に響こうとも、かつての破滅的な体制の加害者たちが負うべき罪を、法
治国家として我が国ほど精力を傾け、息長く追及してきた国は、世界史上、

例がありませんでした。これは決して慰めとなるものでも弁明となるものでもありません。ただそのことは知っておいて頂きたいのです。

最後になりましたが私の講演を要約いたします。

・我が国ではナチズムの戦後史が一連の構造的な不作為や政治スキャンダル、司法の機能不全といったものへと矮小化されることは少なかったのですが、その点を理由として、ドイツは唯一の「サクセスストーリー」だなどと言って評価することはできません。1970年代に至るまで新生ドイツの国造りになお決定力を持っていたのは、ナチス時代のエリートたちだったのです。その後でようやく改革派の若き「懐疑的世代」が登場して、真相解明と変革を迫ったのです。この世代は真のリベラリズムの中で成長しました。そしてかろうじて及第点を得ることのできる民主主義者となるチャンスで、その手にしっかり握ったのです。

・現在のドイツはリベラルで開かれた国家であり、ヒトラー体制およびその負の遺産と正面から取り組んだ国となっております。

・ただしありていに言えば、加害者が高齢となって一人また一人と死んで行き、同じく被害者も証人も徐々にいなくなったということなのです。現在は個人の記憶がますます稀になりつつあります。この現状に目を向けるなら「いかにしてそれが起き得たのか」を知るということが必要となります。自ら進んで記憶しようとする意欲だけでは不十分で、心に刻む義務というものが必要なのです。

・「いかにしてそれが可能となったのか」という問いに、いついつまでという期限を設けてはなりません。この問いに関しては時効などないのです。

あなた方の国、日本でも。そして私の国、ドイツでも。私の国について言えるのは、ともあれ私たちはこの義務を自覚してはいるということです。

- ご静聴、心より感謝いたします。

【原文】

Die Gegenwart der Vergangenheit—oder: Die Pflicht des Erinnerns

Von Helmut Ortner

Kyoto, 19. Dezember 2017

Ich möchte Ihnen erzählen von meinem Land, von der mühsamen, gelegentlich schmerzhaften Auseinandersetzung mit der eigenen Vergangenheit, einem düsteren Kapitel, in dem die Generation meiner Väter und Großväter Schrecken und Barbarei in die Welt brachten. Als Befehlsempfänger, willfährige Bürokraten ideologisierte Überzeugungstäter—als Mitläufer, Mitwisser und Weg-Seher.

Nach dem Ende des sogenannten » Dritten Reiches «, nach der Kapitulation wurden die Deutschen mit den Hinterlassenschaften konfrontiert: der Schuld, der Mitschuld, der Verdrängung, der Scham.

Schuld kann nicht nur einzelne Menschen betreffen, sondern ganze Generationen, nicht nur einzelne Taten, sondern ganze Abschnitte der Geschichte. Gesellschaftliche Schuld und individuelle Schuld—wo bedingen sie einander, wo ergänzen sie sich, wo fügen sie sich zu einer großen einvernehmlichen Allianz des Inhumanen, der Barbarei?

Der deutsche Autor und Jurist *Bernhard Schlink* spricht von einer kollektiven *Vergangenheitsschuld*—und » *Vergangenheitsbewältigung* « nannten die Deutschen den schwierigen Prozess, der die politische Kultur lange prägte—und bis heute fortwirkt.

Tatsache ist: die Zeit des » Dritten Reiches « entschwindet der Zeitgenossenschaft, der Nationalsozialismus verabschiedet sich gewissermaßen aus dem kollektiven Vorrat persönlicher Geschichtserfahrung. Täter und Opfer sterben aus.

Für die allermeisten Menschen in meinem Land ist die Hitler-Zeit keine erlebte Vergangenheit, sondern nur mehr Geschichte. *History, not memory.*

Die Generation, der ich angehöre, die nach dem Krieg geboren wurde und der laut unserem ehemaligem Kanzler *Helmut Kohl* die » *Gnade der späten Geburt* « zuteil wurde, diese Generation der Nachgeborenen trägt keine Schuld—aber sie hat die Verpflichtung zur Erinnerung. Denn: das *vergangene Geschehen* ist, wie der deutsch-französische Publizist *Alfred Grosser* anmerkt, *keineswegs abwesend in der Gegenwart, nur weil es vergangen ist.*«

Also blicken wir in die Gegenwart.

In meinem Land ging im Sommer vorigen Jahres ein weltweit beachteter Prozess zu Ende. Vor Gericht stand ein 94-Jähriger Greis: ein ehemaliger Auschwitz-Wachmann. Obwohl ihm die Richter keine konkrete Tatbeteiligung nachweisen konnten, wurde er wegen Beihilfe zum Mord in mindestens 170 000 Fällen zu fünf Jahren Haft verurteilt.

Ein ungewöhnliches Urteil. Während der Verhandlung tat der Angeklagte das, was die meisten seiner Generation seit 70 Jahren getan haben, wenn es um ihr Tun und Nichtstun zwischen 1933 und 1945 ging: er schwieg.

Nicht einmal seiner Familie habe er über Auschwitz erzählt, berichteten seine Verteidiger. Der erwachsene Sohn des Angeklagten saß im Gerichtssaal: ratlos, sprachlos, verunsichert. Was wusste er über das Tun seines Vaters? Was hätte er wissen können? Hatte er ihn jemals befragt? Zu Hitler-Deutschland, zu Auschwitz, zu seiner Zeit als junger Soldat? Zum Schweigen gehören häufig zwei: einer, der nichts sagt, und ein anderer, der nichts fragt. Nach dem Krieg wurde in vielen deutschen Familien geschwiegen.

Das Gericht sah es als erwiesen an, dass der frühere Wachmann des Vernichtungslagers mit seinem Einsatz zum Funktionieren der Mordmaschinerie in Auschwitz beigetragen hat. Von 1943 bis 1944 war in Auschwitz eingesetzt. Er hatte im Prozess zugegeben, Mitglied der SS-Wachmannschaft des Vernichtungslagers der Nationalsozialisten gewesen zu sein und vom Massenmord gewusst zu haben.

Die Staatsanwaltschaft stellte fest, der Angeklagte habe einen Beitrag zum »reibungslosen Ablauf der Massenvernichtung« geleistet, das Morden billigend in Kauf genommen. Da spielte es demnach eine untergeordnete Rolle, wie groß dieser Beitrag gewesen war, so das Gericht.

Das Urteil: Fünf Jahre Haft. Zum ersten Mal war von einem deutschen Gericht gesagt worden, dass man als »einfacher« SS-Mann für alle

Morde in Auschwitz mitverantwortlich sei. Der Schuldspruch hatte eine Botschaft: als SS-Bewacher in Auschwitz war jeder zum Täter geworden. In Auschwitz durfte man nicht mitmachen.

Nach dem Prozess blieben viele Fragen. Kann die Justiz ein Verbrechen nach mehr als 70 Jahren noch sühnen? Kann ein Gericht jemanden angemessen bestrafen für die Beteiligung am Holocaust? Und was ist mit den Opfern? Kann ihnen überhaupt Gerechtigkeit widerfahren? Und vor allem die eine Frage, die über dem gesamten Verfahren schwebte: Warum hat es mehr als sieben Jahrzehnte gedauert, bis dem Angeklagten der Prozess gemacht wurde?

Die Antwort ist so einfach wie erschreckend: weil die Gesellschaft, der Staat, die Justiz es nicht wollten. Nicht nach dem Krieg, nicht in der Adenauer-Republik, nicht in der sozialdemokratischen Brandt-Schmidt-Ära, nicht unter Helmut Kohl.

Nun kann man die Regierungen für das mangelnde Interesse der zuständigen Staatsanwaltschaften und Ermittlungsbehörden, sowie der Verschleppung der Verfahren nicht unmittelbar verantwortlich machen—in einem Rechtsstaat gibt es eine unabhängige Justiz. Es fehlte an gesetzgeberischen Signalen. Es fehlte der politische Wille, NS-Straftäter—als diese noch *keine* Greise waren—vor Gericht zu bringen.

So blieb das Strafverfahren gegen den alten SS-Mann vor allem eines: ein Symbol. Es erinnerte daran, dass eine Beteiligung an staatlichen

Massenmorden nicht ungesühnt bleiben darf, selbst wenn dies erst nach vielen Jahrzehnten geschieht. Der SS-Wachmann wurde verurteilt—mit 94 Jahren. Ähnliche Verfahren wird es kaum noch geben. Der Schuldspruch gegen ihn erinnert daran, dass Zigtausende Mörder, Schreibtischtäter und Mordgehilfen ohne Strafe davonsamen.

Es ist eine Tatsache: Die Aufarbeitung des NS-Unrechts durch die deutsche Nachkriegsjustiz ist eine Geschichte der Verspätung und Verzögerung.

Einige wenige Zahlen: Bis 2005 wurden insgesamt gegen 172 294 Personen wegen strafbarer Handlungen während der NS-Zeit ermittelt. Das ist angesichts der monströsen Verbrechen und der Zahl der daran beteiligten Menschen nur ein winziger Teil. Das hatte seine Gründe: Im Justizapparat saßen anfangs dieselben Leute wie einst in der NS-Zeit. Viele machten sich nur mit Widerwillen an die Arbeit. Auch politisch wurde auf eine Beendigung der Verfahren gedrängt, dafür sorgten schon zahllose Amnestiegesetze.

Nur 14 693 Angeklagte mussten sich tatsächlich vor Gericht verantworten. Verurteilt wurden schließlich gerade einmal 6656 Personen, für 5184 Angeklagte endete das Verfahren mit Freispruch. Die meisten Verurteilungen—rund 60 Prozent—endeten mit geringen Haftstrafen von bis zu einem Jahr. Vor dem Hintergrund eines der größten Verbrechen in der Menschheitsgeschichte eine skandalöse, empörende Bilanz.

Von der Justiz hatten die NS-Täter nichts zu befürchten. Und von der

Gesellschaft? Von Bekannten, Nachbarn, Arbeitgebern? »Irgendwann muss doch auch mal Schluss sein«—so lautete das einverständliche Credo. Die meisten Deutschen wollten von Kriegsverbrechern, von Verbrechen gegen die Menschlichkeit, von den Nazi-Verstrickungen, von schuldhaften Täter-Biographien, kurz: vom moralischen und zivilisatorischen Desaster des Hitler-Deutschlands nichts mehr wissen.

Die Politik von Deutschlands ersten Nachkriegs-Bundeskanzler Konrad Adenauer stand vom ersten Tag an im Zeichen von Amnestie und Integration der Täter. Straffreiheit für bestimmte staatliche Akte der NS-Diktatur zum Bestandteil der Rechtsordnung zu machen, darum ging es. So verwandelten sich Tötungs- und Gewaltdelikte in eine «von oben» befohlene Straftat ohne eigene Verantwortung. Die Täter und deren Taten wurden »*weißgewaschen*«. Sie hatten angeblich keine eigene, sondern eine »*fremde*« Tat begangen. Gewissermaßen stellvertretend ihre Pflicht erfüllt, ihrem Eid verpflichtet— für Partei, Volk und Vaterland. Wo Gehorsam höchste Tugend war, konnte die Erfüllung der Tugend nichts Schlechtes sein. Es war ein Geist, der biedere Bürger dazu führte, verwerfliche, erniedrigende, menschenunwürdige Anweisungen blind zu befolgen, weil die meisten sie befolgten. Befehl war Befehl. Verordnung war Verordnung. Gesetz war Gesetz.

Ganz nach dem Verständnis von *Hans Filbinger*, ein Mann, der als Kriegsrichter das Todesurteil gegen einen desertierten Matrosen nur wenige Tage vor Kriegsende 1945 beantragt hatte und es später zum Ministerpräsidenten eines Bundeslandes brachte, dann aber zurücktreten musste, weil weitere von ihm unterzeichnete Todesurteile an das

Licht der Öffentlichkeit kamen. Filbingers Äußerung: » *Was damals Recht war, kann heute nicht Unrecht sein*«, stand für das Rechtsverständnis der Kriegsgeneration.

Den Auftakt dieser Vergangenheits-Umdeutung bildete zu Jahresende 1949 ein erstes, vom Bundestag einstimmig im Eilverfahren verabschiedetes *Straffreiheitsgesetz*, das sämtliche Straftaten amnestierte, die vor dem 15. September 1949 begangen worden waren und mit einer Gefängnisstrafe bis zu sechs Monaten geahndet werden konnte. Gut 80 000 Personen profitierten davon.

Die bei den Deutschen ohnehin bestehende Neigung, dem fundamentalen Unrechtscharakter des NS-Regimes und seiner Eroberungskriege aus dem kollektiven Bewusstsein auszublenden, wurde also von der Adenauer-Regierung konsequent umgesetzt. Unter dem Eindruck zeigte vor allem die Justiz nur wenig Neigung, ehemalige NS-Täter zur Verantwortung zu ziehen, zumal dort bekanntlich eine besondere *starke personelle Kontinuität zur NS-Zeit* gegeben war. Die Bereitschaft, in NS-Strafsachen zu ermitteln und zu handeln, ging auf nahezu null.

Es gab Ausnahmen: mutige Frauen und Männer, wie etwa *Fritz Bauer*, Generalstaatsanwalt im Bundesland Hessen, ein Sozialdemokrat jüdischer Herkunft, der zu den wenigen unbelasteten Justizjuristen gehörte, die in der jungen Bundesrepublik eine Führungsposition einnahmen und der nichts so hasste, wie die gängigen Verteidigungs-Entschuldigungsformeln der Verharmlosung.

Bauer setzte die Aufhebung der Verjährungsfrist für NS-Morde durch, ohne ihn hätte es 1963 den großen Frankfurter Auschwitz-Prozess nicht gegeben. Und ohne diesen Prozess gegen ehemalige Bewacher des Vernichtungslagers hätte die deutsche Öffentlichkeit noch viele NS-Verbrechen verdrängt. Und er sorgte mit dafür, dass Adolf Eichmann in Israel vor Gericht gebracht wurde, dem Chef-Organisator des Holocaust.

Fritz Bauer zwang die Deutschen zum Hinsehen, trotz und inmitten einer Justiz, die noch immer von braunen Seilschaften durchsetzt war. »Wenn ich mein Büro verlasse, betrete ich feindliches Ausland«, beschrieb er einmal seine Lage später in einem Fernseh-Interview.

Bauer erkannte klarsichtig, dass der NS-Staat kein Betriebsunfall der Geschichte war und wies auf die geschichtlich gewachsenen Strukturen und Mentalitäten hin, die den NS-Verbrechen so sehr entgegenkamen und die aufzubrechen mehr erfordern würde als Gerichtsprozesse. Damit handelte er sich nicht nur den Zorn konservativer Kreise ein. Bauer wurde gemieden, bekämpft und bedroht. In einer Nachkriegsjustiz, die die personelle Kontinuität mit der NS-Justiz wieder hergestellt hatte, war er ein Ketzer. Er hatte wenig Freunde. Er starb 1968 als einsamer Mann.

Es bleibt eine beschämende historische Tatsache: Zehntausende Juristen, Ärzte, Unternehmer, Journalisten und Offiziere, die dem NS-Regime in wichtigen Positionen gedient hatten, setzten erfolgreich »entnazifiziert« — in der Bundesrepublik ihre Karrieren fort. Die Opfer aber, die Hinterbliebenen und Verfolgten, die ins Exil gedrängten und

Ausgegrenzten, sie alle mussten häufig über Jahre erniedrigende Erfahrungen im Kampf um ihre Wiedergutmachungs- und Versorgungsansprüche machen.

Danach, was ihre Großväter und Väter angerichtet, zugelassen und weggesehen hatten—wie die Opfer entschädigt und rehabilitiert wurden, danach wurde erst in den 60er Jahren und 70er Jahren gefragt. Die sozialdemokratisch-liberale Regierung unter *Willy Brandt*, der als junger Mann vor der Nazis ins norwegische Exil geflüchtet war, sorgte dafür, dass eine ernsthafte Auseinandersetzung mit der NS-Zeit—aber auch der Zeit nach 1945, die Zeit der Integration der Täter und Belsteten—in das öffentliche Bewusstsein gerückt wurden. Das lange Schweigen, Vertuschen und Schönfarben gingen damit zu Ende. Eine schmerzhaft öffentliche kollektive Auseinandersetzung— aber eine notwendige.

Und in der DDR, dem anderen bis 1989 kommunistischen Teil Deutschlands?

Der »sozialistische Arbeiter- und Bauernstaat«,— so dessen propagandistische Selbst-Definition—glaubte, sich der braunen Vergangenheit entledigen zu können. Mit den personellen Hinterlassenschaften des NS-Regimes wollte man nichts zutun haben. Über eine Million ehemalige Nazi-Parteigänger wurde lautlos integriert, bei brisanten Täter-Biographien unter aktiver Mithilfe des Staatsicherheit-Apparates, dem allgegenwärtigen Geheimdienst. Hier sorgte eine gesonderte Expertengruppe—bestehend aus über fünfzig Mitarbeitern—dafür, den

antifaschistischen Schein zu wahren.

Es war die Zeit des sogenannten »kalten Krieges«.

Ob Ost oder West— die Frage bleibt: gibt es eine kollektive Schuld? Machen sich alle, die die Vergangenheit verdrängen oder gar leugnen, nicht mitschuldig? Der deutsche Publizist *Ralph Giordano* hat dafür den Begriff von den »zweiten Schuld« geprägt.

Gibt es nicht eine individuelle Moral, eine ganz und gar persönliche Schuld? Wer waren die Täter des nationalsozialistischen Vernichtungskrieges? Waren sie Bestien oder Befehlsempfänger, desinteressierte Bürokraten und willenlose Rädchen im Getriebe? Waren sie ideologisierte Überzeugungstäter oder gewöhnliche Verbrecher?

Die Geschichtswissenschaft hat sich jahrzehntelang fast ausschließlich auf die Haupttäter *Hitler, Himmler und Heydrich* oder auch Schreibtischtäter wie Eichmann konzentriert und die Akteure der zweiten und dritten Ebene, die Vollstrecker vor Ort, ausgespart.

Wie aber wird man zum Täter, zum Befehls-Verbrecher? Wie werden aus ganz gewöhnlichen Männern inhumane, barbarische Vollstrecker? Was trieb Männer dazu, zu Schreckensfiguren, zu Mördern zu werden?

Studien der Täterforschung zeigen, wie extreme Konformitätsbereitschaft sich entladen kann, wenn Gruppendruck und Situationen es erfordern—oder soll man sagen: ermöglichen?

Gilt das, was für den Soldaten zutrifft, auch für den »gewöhnlichen« Bürger, für Verwalter und Funktionsträger? Sind sie nur mitgelaufen, haben sie weggesehen, weil alle weggesehen haben? Razzien und Verhaftung gegen Oppositionelle, Todesurteile des Volksgerichtshofes gegen Widerstandskämpfer – auf blutroten Plakaten, öffentlich ausgehängt, jüdische Mitbürger, die ausgegrenzt, verfolgt und verhaftet, schließlich in Konzentrationslagern transportiert wurden—für die meisten eine Fahrt in den Tod

Wer sehen wollte, konnte sehen.

Vergangenheitsbewältigung—eine Lebenslüge der Deutschen? Ein juristischer, gesellschaftlicher und politischer Etikettenschwindel? Kann, was geschehen ist, überhaupt bewältigt werden?

Deutschland heute: Die Vergegenwärtigung der Vergangenheit folgt anderen Prämissen. Nicht die Verleugnung und Verdrängung der Adenauer-Ära, nicht die Fragen der skeptischen Generation der Siebzigerjahre nach der Schuld und Mitschuld ihrer Väter und Großväter stehen im Vordergrund: Heute bestimmen einerseits kontroverse Auseinandersetzungen über eine neue Gedenkkultur die öffentliche Debatte, andererseits ist die Erinnerung an die Verbrechen des Nationalsozialismus mehreren Relativierungen ausgesetzt, in denen es vor allem um »*deutsche Opfer*« geht: die Brandbomben auf deutsche Städte, die Verbrechen des Stalinismus—grausame Wirklichkeiten in der Tat. Freilich: Kausalitäten und Dimensionen des Terrors sind nicht aufrechenbar. Ein Vergleich ist historisch mehr als fragwürdig.

Das tatsächlich Geschehene weicht einem historischen Mythos, der keine Widersprüche kennt. Die Gestalten, die Propaganda, die Verbrechen der Nationalsozialisten, das reale Grauen schlägt mitunter um in schauernde Faszination. Die Nazi-Ära verkommt zur beliebig ersetzbaren Chiffre des Bösen—mit einem verhängnisvollen Nebeneffekt: der Verharmlosung.

So bleibt die juristische Aufarbeitung der monströsen NS-Verbrechen zutiefst unbefriedigend. Und dennoch, so paradox es klingt: Es hat niemals in der Weltgeschichte in Land gegeben, das mit größerer Energie und längerem Atem die Täter des vorangegangenen unheilvollen Regimes rechtsstaatlich zur Verantwortung gezogen hat als Deutschland. Das ist kein Trost und auch keine Entschuldigung—man sollte es aber wissen.

Ziehen wir ein Fazit: so wenig sich die Nachkriegsgeschichte des Nationalsozialismus in meinem Land sich auf eine Kette struktureller Versäumnisse, politischer Skandale und juristischer Defizite reduzieren lässt, so wenig kann sie als alleinige »Erfolgsgeschichte« beschrieben werden. Es waren die Funktions-Eliten der Hitler-Zeit, die das neue Deutschland bis in die 1970er Jahre hinein entscheidend gestalteten, erst danach drängte eine junge »skeptische Generation« von Reformern in allen gesellschaftlichen Bereichen auf Aufklärung und Wandlung. Diese Generation wuchs in wahrer Liberalität heran und ergriff die Chance, zu passablen Demokraten zu werden.

- Deutschland ist heute ein liberales, ein offenes Land, ein Land, das

sich der Auseinandersetzung mit dem Hitler-Regime und seinem Erbe gestellt hat.

- Tatsache ist: Die Täter sterben aus—die Opfer und Zeitzeugen ebenfalls. Mit Blick auf die Gegenwart, in der persönliches Erinnern immer seltener wird, braucht es deshalb Wissen, wie „*es geschehen konnte*“ nicht nur die Bereitschaft zur Erinnerung, sondern die Pflicht des Erinnerns.

- Die Frage, »*wie war es möglich*« darf nicht verjähren. Für sie gibt es keine Verjährungsfrist. Nicht für Ihr Land, nicht für mein Land. Für mein Land kann ich sagen: Wir sind uns dieser Verpflichtung bewusst.

- *Ich danke Ihnen für ihre Aufmerksamkeit.*

以上